

Title	図書検索システムの問題点
Sub Title	The problem with the system library search
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.161(184)- 176(169)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

図書検索システムの問題点

田坂 憲二

はじめに

講義の過程で、さまざまな参考文献や課題図書を提示することがある。出来れば次の授業までに読んでくるようにと言うこともある。熱心な学生なら最初の空き時間に学内の図書館に出向いて、その本を読もうとするであろう。したがって、図書館の蔵書の質と量は、大学教育の生命線である。図書資料購入費へのマイナスシーリングに対して、図書館や教職員が強く異議申し立てをするのは、教育の質の低下に繋がりにかぬないからである。

一方で、たとえ書籍を所蔵していても、学生がその資料に辿り着けなければ意味はない。利用の便を考えれば極力全冊開架が望ましいが、たとえ離れた保存書庫であっても、二十四時間以内にカウンターに届けられるシステムが望ましい。書庫や収納施設の問題は大規模な予算やキャンパス事情に関連するから置くとして、ここで取り上げたいのは、学生が書籍まで辿り着くための検索システムの問題である。

たとえば、芸術作品において、先行作品がどのように引用されているか、後続作品にどのような影響を与えているか、相互比較をする講義などの場合は、学生が参照する資料も多くなる。一九二〇年代の夭折の画家佐伯祐三の世界と、二〇世紀から二一世紀にまたがって活動する久石譲の音楽とがどのように交錯するかという、美術と音楽という次元の異なる分野を論じる場合もあるだろう。また、同じ文学という世界で、直接的な引用が見

られる、川端康成の『伊豆の踊子』と松本清張の『天城越え』を対比してみることもある。ここでは、この二つの作品を読んでくるように課題を出したとして話を進めよう。

猶、本稿においては、OPACのデータを使用することが多いが、各組織で表示形式が異なっているため、改行、全角半角文字、各種記号、句読点の類などは私に統一した箇所があることをお断りしておく。

一 コスモスから本の宇宙へ

まず、慶應義塾大学の図書検索システム「KOSMOS」で「伊豆の踊子」で検索をかけてみると、美しい金星堂版の複製をはじめとして十四項目がヒットする^(注1)。しかしこの中には作品論も含まれるため、十四人の学生が同時に読むことが出来るわけではない。すぐに気がつくのは『川端康成全集』の類^(注2)や、『日本文学全集』の類がこの形では検索されないと言うことだ。それでも『伊豆の踊子』の場合は、川端の代表作として、ほとんどの文学全集に採られているから問題はない。極端に言えば文学全集のうち「川端康成集」とあるものを書架から引き出せば、まず間違いなくそこにこの作品が入っているのである^(注3)。これに対して、川端の『伊豆の踊子』的な存在ではない清張の『天城越え』の方は、図書館で探し出すには多少手間取るかもしれない。

では、具体的に『天城越え』を探してみよう。

「KOSMOS」では、「タイトル中の名前」「著者」「項目を特定しない」「出版社」「出版年」などを最大四つまで組み合わせて検索できるが、出来るだけ広く候補を探すために、組み合わせ検索ではなく、単独検索を実行してみる。

まず、もっとも一般的な方法である「タイトル中の名前」で検索してみると、『天城越え』は、一件もヒットしない。すなわち『天城越え』というタイトルの本は、本学に所蔵されていないことになる。おそらく、多くの学生は、課題図書を読むようにとの指示を受ければ「書名」とか「タイトル」で探すから、この部分で検索に掛からないというのは問題であろう。

もう少し範囲を広げて「項目を特定しない」に「天城越え」の文字を入れてみると、以下の五つの資料が出てくる。

- 一 『松本清張を読む』（佐藤泰正編、笠間書院、2009、笠間ライブラリー、梅光学院大学公開講座論集、第五八集）
- 二 『伊豆と黒潮の道』（仲田正之編、吉川弘文館、2001、街道の日本史、二二）
- 三 『松本清張 時代の闇を見つめた作家』（権田萬治著、文藝春秋、2009）
- 四 『温泉文学論』（川村湊著、新潮社、2007、新潮新書、二四三）
- 五 『清張 闘う作家 「文学」を超えて』（藤井淑禎著、ミネルヴァ書房、2007、ミネルヴァ歴史・文化ライブラリー、一〇）

一見してわかるが、一、三、四、五は、硬軟取り混ぜて松本清張の『天城越え』を論じたり、言及があるもの。二は街道としての天城越えの道にふれたもの。従ってこれらで、松本清張の短編小説『天城越え』そのものを読むことは出来ない。

にもかかわらず、「天城越え」というキーワードでこの五冊に辿り着いたのは、これらの書物の目次や内容紹介の文章の中に「天城越え」という言葉があるからである。

たとえば、藤井淑禎の『清張 闘う作家 「文学」を超えて』を例に挙げれば、以下のような文章が内容紹介として付けられている。猶、検索結果表示の初期画面では、表示文字数に限界があり、この文章の冒頭から「天城越え」の「天城越」の部分までしか表示されない。詳細をクリックすると以下の全文表示がなされる。

清張が面白いのは小説の王道を究めたからだ。漱石、芥川、菊池等の小説技法を継承し、私小説、純文学に敢然と闘いを挑んだ清張文学の豊饒さを示す。

〈目次〉

- 一 本流としての清張文学(ミステリーの自覚——菊池・芥川の地層と清張、本流としての清張文学——漱石から清張へ)
- 二 清張の闘い(清張と本格派——乱歩封じ込め戦略のてんまつ、「天城越え」は「伊豆の踊子」をどう超えたか、清張と純文学派——対決の構図)
- 三 清張ミステリーの多彩な実践(迷宮としての「地方紙を買う女」、「氷雨」とその時代——売春防止法前後、小説とノンフィクション、メディアと清張ミステリー)
- 四 松本清張と水上勉(松本清張と水上勉——水上勉における日本型小説への回帰、水上勉の社会はミステリー——『飢餓海峡』の達成)

実は、新刊書店のウェブ情報でも『清張 闘う作家「文学」を超えて』を調べると完全に一致する文章が出てくる。たとえば〈紀伊國屋書店 BookWeb〉(<http://bookweb.kinokuniya.co.jp>)がそうである。また〈livedoor books〉(<http://books.livedoor.com/>)、〈セブンネットショッピング〉(<http://www.7netshopping.jp/books/>)などでも、同じ文章が出ており、購入の参考にすることが出来る。同一の解説文が出てくるのは、共通のデータベースによっているためである。国立情報学研究所の Webcat Plus (<http://webcatplus.nii.ac.jp/webcatplus/details/book/>)で、この本の内容紹介の箇所を見てみると「清張が面白いのは小説の王道を究めたからだ。漱石、芥川、菊池等の小説技法を継承し、私小説、純文学に敢然と闘いを挑んだ清張文学の豊饒さを示す」と、「1 本流としての清張文学」で始まる「目次」との間に「『BOOK データベース』より」と明示されている。すなわちこれは、紀伊國屋書店、日外アソシエーツ、トーハン、日販が共同作成したデータベースを淵源としているのである^(注4)。

それでは、慶應義塾大学の本の宇宙の中には、作品としての『天城越え』はないのであろうか。清張の『天城越え』そのものを読むことは出来ないのであろうか。宇宙から大地に目を転じてみよう。

二 書籍の大地をおおう蜘蛛の巣

ここで、視点を変えて国立情報学研究所の Webcat を参照して検討することにしよう。

本学は一九八六年四月十五日に NACSIS-CAT に参加しているが^(注5)、これは東京六大学中の私学第一号^(注6)であり、私学全体としても同年四月三日の成蹊大学に次ぐ二校目で、三月末時点では国立大学十三大学に留まっていたこのシステムの広がりを見定めたものであり、高く評価できる。

さて、『天城越え』という作品が他大学図書館の所蔵情報ではどうなっているか比較する必要があるが、参加校は蔵書数の多い総合大学から、小規模な単科大学まで様々であるので、どの大学と比較するかによって見方も異なってくる。そこで NACSIS-CAT に参加した時期で選び、本学に相前後して、同一月内に参加している私立成蹊大学と国立茨城大学の例を見よう。茨城大学を最初に見ると分かりやすいので、こちらから先に検討する。

茨城大学図書館 OPAC WWW 検索サービス (<http://opac.lib.ibaraki.ac.jp/opac/>) の詳細検索のタイトルの項目に「天城越え」と入れてみると、以下の三つの資料がヒットする。

- 一、黒い画集／松本清張著、文藝春秋、1971.8 (松本清張全集／松本清張著・四)
- 二、静岡／藤沢全責任編集、ぎょうせい、1994.12 (ふるさと文学館、第二六巻)
- 三、紐、天城越え、証言、寒流／松本清張著、光文社、1959 (黒い画集、第二)

三文献とも、松本清張の『天城越え』を作品として収録しているものである。一の『松本清張全集』などは、本学にも所蔵されているはずである。「KOSMOS」で『松本清張全集』を探してみると、日吉と三田に一セット

ずつ所蔵され、どちらのキャンパスでもこの作家の大部分の作品が読めるように配慮されている。予算の限界もあろうが、基本図書は日吉・三田の両方で手に取ることが出来るようにしておくことが肝要である。では同じ資料を所蔵していながら、茨城大学では検索システムで探し出すことが出来、本学ではそこに辿り着かないのはなぜであろうか。『松本清張全集』第四巻の、茨城大学の図書詳細情報を見ることによってそのことは解決する。そこでは以下のように記されており、内容注記に作品名の『天城越え』があるから、タイトル・ワードの項目で検索できたのである。

黒い画集／松本清張著 タイトルのヨミ：クロイ ガシュウ

出版事項：東京：文藝春秋、1971.8

形態：492p：20cm

シリーズ名：松本清張全集／松本清張著〈BN04770989〉4/b

ISBN：4165090409

内容注記：遭難、坂道の家、紐、天城越え、証言、寒流、凶器、濁った陽、草
注記：解説：多田道太郎（以下略）

これに対して、本学の場合、『松本清張全集』の個別の巻冊ごとの書誌情報ではなく、全集全体としての箇所のように詳細が記されている。

タイトル：松本清張全集／松本清張著

著者：松本清張

ISBN / ISSN：ISBN4165090107（1）、ISBN4165090204（2）、
ISBN4165090301（3）、ISBN4165090409（4）、ISBN4165090506（5）、
ISBN4165090603（中略）

注記：1、点と線、時間の習俗、影の車 2、眼の壁、絢爛たる流離 3、
ゼロの焦点、Dの複合 4、黒い画集 5、砂の器。（以下略）

ここでは、一冊ごとの ISBN は明示されているが、第四巻は『天城越え』

を単行本として取載したときのシリーズ名に由来する「黒い画集」の名前が掲出されているだけである。

結局、「注記」や「内容注記」の所に「天城越え」の名前があるか否かで、検索にヒットするかしらないかの一つの分かれ目となる。もちろん内容注記に書名があっても、それをタイトルなどにリンクさせていなければ意味はない。

試みに本学でも「黒い画集」を「タイトル中の語」に入れても該当資料はないが、「項目を特定しない」の項目で検索すると、二件ヒットする。

一件が『松本清張を推理する』（阿刀田高著、朝日新聞出版、二〇〇九年、朝日新書一六九）で、以下のように、詳細情報のうち「黒い画集」を含む部分が示される。ディスプレイ上では「黒い画集」の部分がゴシックで示されて、検索はどの部分にヒットしたのかが一目で分かるようになっている。

日記』伝』について、第2章・覗き見志向から—『張込み』の原点、第3章・温故知新の第一作—『点と線』あれこれ、第4章・短編連作集への道—『無宿人別帳』の光と影、第5章・動機の重要性—『ゼロの焦点』のポイント、第6章・多彩で名作ぞろい—『黒い画集』の分析、第7章・知的な蛮勇—『日本の黒い霧』雑感、第8章・小説と映画のちが

表示されているのは、文章の途中から途中までであって、一度に表示できる文字数の関係から、検索キーワードを含む部分を機械的に一定分量表示したものであることが分かる。もし全文を知りたい場合は、「詳細」をクリックすればよい。内容注記などの情報量が多すぎる場合、これはなかなか巧みなシステムである。

もう一件は、『松本清張全集』（文藝春秋、一九七一～）と示されるのみで、ほかの情報はこの段階では見えない。「詳細」をクリックしてはじめて、全集全体のISBNと、全冊の巻名が示される。かくして『天城越え』

が単行本『黒い画集』に記載されているということを用いれば、『松本清張全集』の中の『黒い画集』の分冊を探し出して、『天城越え』に到達することが出来る。わずかな灯りを頼りに天城隧道を歩くようなものだが。

茨城大学の検索システムで、第二冊目として出てきた『静岡』については、次節で改めて検討する。

第三冊目の「紐、天城越え、証言、寒流／松本清張著、光文社、1959。（黒い画集、第2）」については、新装版が成蹊大学にあるから、次は成蹊大学のサイトを見てみよう。

まず、成蹊大学の図書館の検索システム (<http://library.seikei.ac.jp/opac/servlet/>) の詳細検索の「タイトル」に「天城越え」と入れると、一挙に図書書誌情報と所蔵情報が表示される（簡易検索のキーワードでも、詳細検索のフリーワードでも同じ）が、ここでは必要な部分のみを摘記してみよう。

図書書誌情報

タイトル 紐・天城越え・証言・寒流／松本清張著

出版：東京：光文社、2005.12 形態：274p：20cm

注記：書名は奥付による

注記：初版：1959年刊

シリーズ：黒い画集 (BA76407326) 2

著者標目：松本、清張 (1909-1992) (DA00375852)

ここでは「黒い画集」をシリーズ名として立項して、「紐・天城越え・証言・寒流」の作品名をタイトルとして立てている。「書名は奥付による」と、書名をどこに依拠したかを明示している。この作品の場合、背表紙、箱の平、背にも「紐・天城越え・証言・寒流」四作品の名前は見えるから、どこから書名を取ったのかを示すことは必要である。ちなみに、鮮やかな赤色の扉には、赤地に白抜きで「黒い画集 2」と、黒抜きで「松本清張」

と、この二つの名前がデザインされるのみである。装丁者は伊藤明である。

ところで、ほとんどの図書館で同一の書誌情報が上書きされるようになったことは、書誌作成業務から図書館員を解放することとなった。それだけに各図書館は、共通の書誌情報に加えて、独自の項目を付加することによって、個性ある書誌情報を作ることも可能なのではないだろうか。特に、電子化が進んでデジタル情報を利用することが進められてくれば（明治期から戦前の文献を中心とした国会図書館の取り組みがその代表である）、生の書籍を手にとることが少なくなってくるから、装丁情報というものの重要性は一層高まってこよう。装丁専門図書館の必要性が説かれていくぐらいであるから^(注7)、まずは装丁者の名前だけでも、著者、発行者と並んで書誌情報に加えるべきではないだろうか。神奈川県立近代文学館では、既に先駆的な試みがなされている。神奈川県立近代文学館資料検索 (<http://www.kanabun.or.jp/kensaku.html>) の検索項目では「著編者名」「人名件名」「出版者名」と並んで「装幀・挿画者名(図書のみ)」を選択できるのである。専門図書館としての大学図書館も、これと呼応する時期に来ている。

ともあれ、茨城大学では一九五九年の元版、成蹊大学では二〇〇五年の新装版で、光文社刊行の『黒い画集』シリーズの第二分冊で『天城越え』が読めることが分かった。

三 ワインを片手に

次に、早稲田大学の図書検索システム「WINE」(<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>) を見てみよう。

このシステムでは、「タイトル検索」「キーワード検索」「著者名等検索」「他の検索項目(出版社別一覧などはここで調べる)」などに分かれていて、それぞれ単独の検索項目で探す形になり、複数の要素を組み合わせて検索することが出来ない。したがって、「キーワード検索」で「天城越え」+「松本清張」(「天城越え」+全角スペース+「松本清張」)の形で検索してみると、以下の十二例が出てくる^(注8)。

Highly relevant titles entries 1-1

一、天城越え、東京：NHK ソフトウェア、2003.3

Very relevant titles entries 2-2

二、静岡、東京：ぎょうせい、1994.12

Relevant titles entries 3-3

三、天城越え、東京：松竹、1997.10

Other relevant titles entries 4-12

四、松本清張傑作映画ベスト10：永久保存版、第3巻、東京：小学館、2009.12

五、黒い画集、東京：新潮社、1988.2

六、天城越え、松竹映像株式会社、[1982]

七、松本清張、東京：新潮社、1978.9

八、天城越え [1978]

九、筑摩現代文学大系、72、東京：筑摩書房、1976.8

一〇、黒い画集、東京：文芸春秋、1971.8

一一、文五捕物絵図、第34話、[東京]：[NHK]、[1967.11?]

一二、黒い画集：推理小説、東京：光文社、1959.12

このうち、一、三、四、六は映像資料である。八は演劇博物館所蔵の企画書である。一一も同じく演博所蔵の文五捕物絵図の台本である。これらを除いた二、五、七、九、一〇、一二で『天城越え』を読むことが出来る。「Highly relevant」「Very relevant」「Relevant」に、単行本のオリジナルテキストと言っても良い『黒い画集』が出てこずに、映像資料が多いのが多少気になるが、利用が多いということなのであろうか。

五は新潮文庫、一〇は既述の『松本清張全集』、一二も既述の光文社版である。七は『新潮現代文学』の第三五巻、第三回配本に起用されているということで、当時の清張の人気の程が窺える^(注9)。このシリーズは外箱をそれぞれ異なった装画で飾るというのも話題であった。松本清張の冊は清塚紀子の担当である。九の『筑摩現代文学大系』は、同じ四六判の『現代

文学大系』を増補したもの。筑摩書房は、同社の基礎を固めた『現代日本文学全集』と、今日まで評価の高い『現代日本文学大系』が共に菊判の大型本であるが、この四六版の二つの全集も読みやすさで広く受け入れられた。

さて、書籍として、最も上位に出てくる『静岡』という書物について見てみよう。前節で述べたように茨城大学でも所蔵されていた。

これは、ぎょうせいが発行している「ふるさと文学館」というシリーズ物の第二六巻で、静岡県に関する作品を集めたものである。アンソロジー、編纂物は、編纂者の個性によって作品選択が左右されるので、第一次資料としては出来れば避けたいものである。本書の場合でも、「風変りな作品」(同書解説六六八ページ)と記される芥川龍之介の『温泉だより』や泉鏡花『半島一奇抄』など、是非収録してほしかったものがあるが、紙幅の都合もあるのであろう。それよりも問題であるのは、本文表記・仮名遣いである。たとえば書名に端的に示されているように、夏目漱石の『思い出す事など』は、現代仮名遣いで記されている。こうしたアンソロジーの常として、今日の読者に親しみやすくするために現代仮名遣いにする方針であるのならそれはそれでよい。ところが『思い出す事など』の次に出てくる吉田絃二郎の『修善寺行』も、川端康成の『伊豆の娘』も旧仮名遣いのままで記されているのである。これはどちらかに統一すべきであろう。巻末に「表記は原文を尊重した」(本全集の編集方針・用語用字について)とあるのはかえって誤解を招くかもしれない。「原文」というのは、作者の表記のままの場合もあれば、すでに仮名遣いを改めた文庫本などの「原文」の場合もあるからだ。底本は明示されているものの、わかりにくい校訂方針である。

ともあれ、『静岡』について「WINE」の詳細情報を見てみよう。タイトルの読みや所蔵情報などを省いて、内容注記などを中心にあげてみる。

タイトル 静岡／藤沢全 責任編集

出版事項 東京：ぎょうせい、1994.12

形態 687p : 22cm ISBN 4324037930

シリーズ名 ふるさと文学館 : 第26巻

注記 監修 : 水上勉ほか

内容注記 河鹿(尾崎士郎)、冬の蠅(梶井基次郎)、赤蛙(島木健作)、天城越え(松本清張)、思い出す事など(夏目漱石)、修善寺行(吉田絃二郎)、伊豆の娘(川端康成)、伊豆伊東(木下杢太郎)、海上雲遠(荻原井泉水)、幽星(西条八十)、峠、紅花一輪(三好達治)、獵銃、瞳(井上靖)、ひそかなるひとへのおもひ、続・ひそかなるひとへのおもひ(福永武彦)、富士山頂(橋本英吉)、殉職(新田次郎)、富士探鳥行(中西悟堂)、富士山一作品第3・第4(草野心平)、産卵せよ富士(大岡信)、自然の慈悲(野口米次郎)、晴天に酔ふ(高村光太郎)、老ハイデルベルヒ(太宰治)、ほか27編

これら内容注記に挙げられている作品は、当然「WINE」のキーワード検索で拾うことが出来る。西条八十の「幽星」や福永武彦「ひそかなるひとへのおもひ」の詩編まで検索に掛かってくるからありがたい。このような点が、内容注記に収載作品を列挙することの最大の利点である。ところが、こうした短い詩に至るまで検索できる一方で、「ほか27編」として省略された作品の中には、吉田知子の芥川賞受賞作『無明長夜』なども含まれているが、この作品を「WINE」のキーワード検索やタイトル検索に掛けても、『静岡』には辿り着けないのである。「ほか27編」にはどういう作品が含まれているのであろうか。

国会図書館でも、NACSIS Webcatでも見る事が出来るが、ここでは鶴見大学のOPAC(<http://library.tsurumi-u.ac.jp/opac>)から掲出する。

我入道／芹沢光治良著、熱海土産／島崎藤村著、熱海と東京／志賀直哉著、南豆荘の将棋盤／井伏鱒二著、田児の浦／土屋文明著、ふるさと／木下杢太郎著、うたのように／大岡信著、少年よ／金井廣著、硝酸銀／藤枝静男著、試みの岸／小川国夫著、孤猿／井上靖著、無明長夜／吉田知子著、蛙の鳴く頃／小出正吾著、名月／中勘助著、雨／田中冬二著、清水の次郎長

／下母沢寛著、次郎長の子分たち／江崎惇著、鉄舟の鉄舟寺 VS. 樗牛の龍華寺／村松友視著、三浦右衛門の最後／菊池寛著、唐人お吉／十一谷義三郎著、下田の吉田松蔭／綱淵謙錠著、影絵／杉本苑子著、頼家の悲劇／安西篤子著、東海道島田宿／多岐川恭著、駿遠歴史散歩／中村真一郎著

これらの作品は何れも、『無明長夜』同様に、「WINE」の検索では『静岡』に所収されているということは分からないのである。藤村の『熱海土産』も、新潮社や筑摩書房の全集など各種のものは「WINE」で検索できるが、『静岡』に収載されていることは、検索機能を使う限りは辿り着けない。紙の図書カードの時代は、収載作品が多くなれば何枚追加しようと、参照項目として別記の形を取ろうと可能であった。今日でも紙のカードを使用する松竹大谷図書館などは、相互に項目が参照でき、実に利便性が高い。電子情報の場合はディスプレイに表示できる見やすさなどもあって、文字数の制限がなされる場合もあるだろうが、書誌情報、特に内容注記に関しては、できるだけ詳細なものが望ましい。

『静岡』に関して言えば、多くの大学が所収作品すべてを内容注記で掲出しているから^(注10)、そうした機関においては、『老ハイデルベルヒ』以前に配列されている作品も、以降に配置されている作品も同じように利用者に開かれているのである。

おわりに

内容注記や内容細目に記されている書名や著者名（出来れば固有名詞すべて）をキーワード検索で探すことが出来れば、図書資料の検索は格段に容易になろう。ある程度経験のある教師よりも、これから経験を積んでいく学生こそその恩恵に浴することとなる。

もちろん、ことは容易ではない。たとえ国立国会図書館であっても、内容注記のキーワードへの反映は完全ではない。『天城越え』に関して言えば、第三節で記述した『新潮現代文学』の第三五巻の松本清張の冊（一九七八年）にはこの作品も収録されており、国会図書館に所蔵され内容注記

もあるが、書名で検索する限りこの書籍に到達することは出来ない。かつて、総合目録データベースと呼ばれ、ゆにかネットと名前を変えたこともある、主要公立図書館の横断検索のデータベースは、現在では国立国会図書館サーチと名前を変えている。ここで検索してみるとその辺の事情がよく分かる。

国立国会図書館サーチの詳細検索で、タイトル「天城越え」著者・編者「松本清張」で検索すると、同じような文学全集でも、『筑摩現代文学大系』七二（松本清張・山本周五郎集、筑摩書房、一九七六）の方は国立国会図書館蔵書 公共図書館蔵書」と出てくる一方で、『新潮現代文学』三五（松本清張 新潮社、一九七八）は「公共図書館蔵書」としか出てこない。国会図書館に所蔵されているにもかかわらず、である。これは国会図書館の、『新潮現代文学』三五の内容注記の『天城越え』がタイトルに反映されていないからである。

もちろん、こうした些細なことを一つ一つ指摘することが本稿の目的ではないことは言うまでもない。完全なデータベースなどあり得ないからである。書誌のデータベースに対する、ある種の醒めた視線の確立と、その一方で不断の改良を続けることと、これらが図書館や、図書を職業的に使用する研究者に課せられた課題であろう。

屋上屋を架するようなことを付言すれば、書誌情報は所詮現物の資料の補助手段に過ぎない。電子情報で分かることはほんの一部分に過ぎない。それだけに、その部分的にしか見えないものをいかに充実させていくかが重要である。図書館の場合、当然のごとく函や帯は放擲される。本稿に関連することに絞っても、『静岡』の函には「全収録作家名」が列挙されており、『松本清張全集』第四巻の帯には『『黒い画集』初版三冊を再現した完全復刻版』と記載されており、これらの記述から、ある程度書物の中身を推測することが出来る。図書館が物質としての函や帯を資料として保存することが無理であるならば、なおさらのことデジタルデータとして記録しておくことは、採るべき道として考えられても良いのではないだろうか。

注

- (1) 『伊豆の踊子』は、金星堂版以外にも、江川書房の小穴隆一装丁本、コロポオ叢書版、細川叢書版など、装丁・美術史的にも注目すべきものが多い。デジタルテキストではなく、書籍そのものを手に取ることは文化史的にもきわめて重要である。江川書房、野田書房、細川書店と純粹造本を追求した人々がこの作品を手がけているのは偶然ではない。高橋啓介『江川・山本・野田の限定本』湯川書房、一九八二年。中林雅士「純粹造本 一江川書房と野田書房一」『明治大学図書館紀要』一、一九七七年三月。曾根博義「細川書店と岡本芳雄」『日本古書通信』一九九六年一月号～五月号。これらの先駆的な仕事を継承して、全体を俯瞰する研究が望まれる。猶、江川書房版には、見返しに枕草子の「あてなるもの」の一節を川端が自書した本が現存する。川端がこの一節を書幅にしたものもあり明治古典会平成二十四年七夕古書大入札会に出陳された、目録番号二四七。
- (2) 川端生前の全集や選集に関しては、田坂「川端康成全集と NACSIS Webcat」『大学図書館の挑戦』和泉書院、二〇〇六年、参照。
- (3) 「川端康成集」を一冊にまとめる場合は、当然のことだがほとんどのものに収載。こうしたデータもあまり見ないようなので代表的なものを挙げておく。筑摩書房『現代日本文学全集』（川端の巻は当初は三七巻。増巻後は六六巻で固定、底本限定版、愛蔵版も同じ。『近代日本文学』というシリーズは『現代日本文学全集』から抽出したもの、川端は第三〇巻で内容は同じ。『新選 現代日本文学全集』は『現代日本文学全集』の補遺として編まれたため『伊豆の踊子』は含まない。ただし『増補決定版 現代日本文学全集』では二つのシリーズをひとまとめにして別巻三となっており多少混乱する。『現代日本文学』第三巻「川端康成集」は『新編』の方の異装版、『現代文学大系』（装丁真鍋博。同じ装丁で色違いの『日本文学全集』はほるぶが販売を担当したもので、筑摩書房の図書目録などには入っていないが広く流通した）、『現代日本文学大系』、『筑摩現代文学大系』。新潮社『日本文学全集』（七二冊版、五〇冊版、四〇冊版、四五冊版とあり、川端の巻は三〇、二〇、一四、一四と変動する）、『新潮日本文学』（『新潮現代文学』の方は「現代」らしく『千羽鶴』『古都』など後期の作品中心）。河出書房『三代文豪全集』、『現代文豪名作全集』、『現代の文学』『グリーン版日本文学全集』。講談社『現代長編文学全集』（類似のタイトルだが『長編小説全集』は『女であること』、『現代長編小説全集』は『東京の人』それぞれ一作品のみ収載）、『日本現代文学全集』。角川書店『昭和文学全集』（後続の『現代

国民文学全集』は作品を棲み分け『女であること』『川のある下町の話』など通俗性のやや勝ったもの中心)、『昭和文学全集』(前述のものは昭和二十年代の菊判のもの、こちらは四十年代の四六判のもの、関連して言えば小学館の『昭和文学全集』もありもちろん収載)、『日本近代文学大系』。中央公論社『日本の文学』。文藝春秋『現代日本文学館』等々。二冊本の場合は「川端康成集」第一集に収載されることが多い。河出書房『豪華版・日本文学全集』『カラー版・日本文学全集』、集英社『日本文学全集』(こちらのカラー版・豪華版は判型装丁の相違のみ)など。

- (4) 田坂、注(2)書「主要書籍検索システム・用語解説」
- (5) 以下のデータは、国立情報学研究所の目録所在情報サービスの、「NACSIS-CAT 統計情報」のうち「NACSIS-CAT 接続機関一覧」(<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/stats/cat/org.html>)によっている。
- (6) NACSIS-CAT への接続の六大学の第一号は東京大学で一九八六年三月四日に参加。
- (7) 『本と装幀』(沖積社、二〇〇〇年)。著者の田中薫は、もと宮崎公立大学附属図書館長。
- (8) 同じようにキーワード検索の「天城越え」と「松本清張」を組み合わせる場合でも、「天城越え」+半角 and +「松本清張」の形を取れば、同じ十二資料ながら、出てくる序列が若干異なっている。今回は優先順位の序列が四段階に細分化されて出てきた、「天城越え」+全角スペース+「松本清張」を基に考察してみた。
- (9) 松本清張は第三回配本と帯や目録類に記されるが、このシリーズは毎月二冊同時配本なので、実質的には二回目の配本。一九八八年八月に安部公房と五木寛之でスタート、翌九月が清張と遠藤周作であった。
- (10) 早稲田大学同様「ほか27編」とするのが愛知淑徳大学・大分大学、冒頭の五作品を掲出し「ほか51編」とするのが愛媛大学、「目次・あらすじの電子情報はありません」とするのが関西学院大学(ただし全作品の内容注記は表面には見えない形で吸収されておりタイトルで「天城越え」を検索すると『静岡』は表示される)、細目が一切表示されないのが共立女子大学、などのパターンがあるが、多くの機関では全作品名を示す。

〈付記〉本稿で使用した Web 上のデータは2012年12月12日現在のものである。